

育成こそクラブの中核

日本ユース代表の不振が続く。W杯南アフリカ大会を見ての通り、スペインをはじめユースW杯の成績は数年後のA代表に直結する。日本は19歳以下(U19)で2大会連続、アジアすら勝ち抜けず、U20W杯の出場権を逃した。所属チームとのからみでベストメンバーを組めず、監督選出も含めて日本協会がベストを尽くした感がないのは猛省すべきだが、不振の背景には構造的問題がある。

Jクラブの育成システムが機能不

全なのだ。トップ昇格から代表選出、海外移籍と実績を残すのはガ大阪だけ。継続的に主力を育てているのも広島と横浜マくらい。最近浦和が台頭したが、多くのクラブでレギュラーが出ない。

特に普及から強化へギアチェンジする中学生年代の育成が心臓部なのに、引退直後の選手や「人事異動」のコーチばかりでいいのか。「6・3・3」の学校制度で指導の継続性が失われる点を、クラブの充実で克服するのがJリーグのテーマだった

Jリーグを 学問する

平田竹男



4

はずだ。

ただし、高校サッカーは貴重だ。中村俊(横浜マ)や本田(CSKAモスクワ)はクラブから高校に移って成長の足場を築いた。選手を複眼レンズで見られる日本独自の強みは残したい。

プロになって2、3年で、出場機会がなく消える選手も多い。こうした選手の出番を確保するため、積極的なレンタル移籍は勧めたい。J1↓J2など下部リーグへのレンタルを慣例化すべきだ。マンチェスター・ユナイテッド(英)のユース出身・ベッカムが有名になったのもレンタルを経験してから。移籍先にも

メリットがある。スペインなどの強豪クラブは、若手の出場機会確保のため下部リーグにもチームを持つ。レンタルは戦力外という後ろ向きなイメージだけではない。

育成は、クラブが目指すスタイルを確立するのが前提。トップの監督も育成法も、それに合わせて選ぶのが筋だ。日本代表のサッカー像も、クラブの目指すサッカー論議が熟せば、ぐんと進化する。

育成はクラブ経営の中核であるべきだ。ファンもスポンサーもトップの成績だけでなく、育成システムを見守り続けてほしい。

(早大大学院教授)